

4 見聞記

「領域別科目群」のカリキュラム編成にまつわる エトセトラ

教務部全学共通カリキュラム事務室 藤野 裕介

“（今はなき）11号館4階会議室に結集した、総合チームミーティングを構成するリーダー（西原廉太）、メンバー（平野隆文、岩崎俊夫、原田久、沼澤秀雄、上田恵介）、部長（山口和範）、副部長（青木康）、全カリ事務室（吉池栄、藤野裕介）、教務事務センター（福田博之、柏原成人）は、自己紹介もそぞろに、2009年度から動き出した新全カリ体制を確認しつつ2012年度総合カリキュラム改編の議論を始める。……”

これは、2009年4月10日に開催した総合教育科目構想・運営チームの初回チームミーティングの冒頭である。全カリは、2008年度までの部会制を廃し、言語、総合の各チーム制に移行した機動力のある運営組織に生まれ変わり、かつ、総合チームでは研究室体制が廃止されてのスタートであった。5名のチームメンバー（人文、社会科学、自然科学、スポーツ・人間科学）、それを束ねるリーダーの精鋭部隊6名によるチーム制のスタート自体もまた、2009年度の春の大事であった。

総合チームミーティングでは、まず、初代チームリーダーを務める西原廉太文学部教授から、2008年1月31日付で出された「2010年度全カリ総合教育検討グループ答申」（いわゆる第1次西原答申）、また2008年12月18日付で出された「学士課程教育検討グループ答申」（いわゆる第2次西原答申）のエッセンスが示され、全カリが培ってきた基本的な理念をベースとしながらも、学士課程教育という視点に基づいたカリキュラム改編の議論がスタートした。

学生が本を読まない、とにかく本を読ませることが大切ではないか、次期のカリキュラムでは本を読むことを授業に組み込む科目を設けられないか・・・比較的早い段階から、本（テキスト）を読むことの重要性が共有され、総括稿3（上田恵介理学部教授）にもあるとおり、古典や名著を読み込む仕掛けに着目した科目群の構想は、「学部基礎科目」、「学部提供科目」などと暫定名称を変えながら、しかし着実に具現化の方向で全学的な議論が盛り上がりみせた。

その後、総合チームの運営は2010～2011年度にかけて第2代チームリーダーを平野隆文文学部教授が務めた。読むことにこだわった科目群の構想は、いつしか（仮）領域別科目と呼ばれ、ディシプリンや専門性を講義形式で行う科目＝「領域別A（講義系）」、さらに古典や名著を用いながら少人数の講義形式で行う科目＝「領域別B（文献

系)」の2種類で構成されることが決まった。当初から読むことにこだわった科目の構想に熱心であった平野チームリーダーの尽力もあり、崇高な理念と野心的な挑戦に満ちた『領域別科目群「領域別A」・「領域別B」』は、2012年度総合新カリキュラムのシンボルとしてまとめ上げられたのである。

領域別科目群は、2015年度をもって現役のカリキュラムとしては閉講となる。しかし、総括稿1（中島俊克経済学部教授）、また同稿2（原田久法学部教授）にもあるとおり、2016年4月から始まる次期カリキュラム「RIKKYO Learning Style」学士課程統合カリキュラム)、そしてグローバル教養副専攻へと、領域別科目の理念と実績は脈々と受け継がれることになる。

領域別科目群の成否もさることながら、新たな教育活動を構想するために全カりに集う教職員の熱意と改革のエネルギーこそ、次代の学生に新鮮、かつ深淵なる驚きを絶えず供するカリキュラムのためにもっとも重要なことであろう。領域別科目群を始めとした2012年度カリキュラムの編成期から終焉期まで7年間にかかわることができ、そしてまた、このシンボリカルな「領域別科目群」の総括の場に立ち会うことができたことに感謝を申し上げたい。

ふじの ゆうすけ